

体育科模擬授業における各運動領域の場面の偏りと課題
—A 大学での期間記録からの検討—

Bias and Problems of exercise fields in Physical Education
Practice Classes

-Examination from the period records at University A

齋藤 遥

- I. はじめに
- II. 研究の概要
- III. 各運動領域の授業場面比較と課題
- IV. おわりに

キーワード：体育科模擬授業 期間記録 授業場面

I. はじめに

小学校教諭免許状の取得には、教育職員免許法施行規則の第六条に定められた科目の単位修得が必要であり、本研究で取り上げる体育科の模擬授業は、第四欄の「教育課程及び指導法に関する科目」の「各教科の指導法」の一科目である「体育科指導法」の中で実践している。

小学校教科・体育は、「豊かなスポーツライフ」を実現する資質や能力の育成を目標とし、児童の発達段階と運動の特性を生かしながら児童の主体的で協働的な学びを保障することが求められており、そうした学びを学校生活のみならず実生活や実社会において生かされていくことが期待されている。また、そうした学びの過程では、三つの柱である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」が確実に身に付くよう、それらの関係性を重視した工夫が求められている。

これらを前提に、体育科は6つの運動領域に保健領域を合わせた7領域で構成されている。そのうちの運動領域では、運動を好きになることや体力を高めることを目的とした「体づくり運動系」、回転・支持・懸垂等の運動を通して技を身に付ける楽しさや喜びの経験を目的とした「器械運動系」、走ったり跳んだりする中で課題や記録に挑戦しながら競走（争）の楽しさを学ぶ「陸上運動系」、特殊な環境での物理的な特性を生かしながら水に親しむ「水泳運動系」、友達と力を合わせて競争する楽しさを味わう「ボール運動系」、イメージやリズムの世界に没入し互いの特徴を生かしながら交流することを楽しむ「表現運動系」がある。

A大学の「体育科指導法」の中では、こうした運動領域と保健領域の内容的理解と教授法を学習しており、教授法の実践的内容になるのが本研究で取り上げる模擬授業である。模擬授業を実施する上で目指すのは「よい体育授業」であり、よい授業の基礎的条件には「学習の勢い」と児童にとって肯定的な「学習の雰囲気」が欠かせない。特に「学習の勢い」は、授業の目標達成と学習成果を上げるための教授活動そのものに直結し、児童の学習従事時間を十分に確保することが求められるため、教師の授業展開力が強く反映される。そのため、模擬授業においては、児童が学習に従事した時間を丁寧に分析・評価し、フィードバックにつなげることが重要である。一方、模擬授業を行う学生の立場からは、教授経験がほとんどない上に各運動領域で取り扱う身体活動が大きく異なることにより内容と教授方法に齟齬が生じやすく、授業場所が広大であることにより学習に直接的に関係のない移動時間等が増えることなど課題も多い。そうした要因から、ときに模擬授業下では十分な学習従事時間が確保されない場面が散見される。したがって、模擬授業の時間等の丁寧な計測と分析評価は、実施者が自身の教授法と授業展開力を客観的に理解する上でも非常に有益な指標となる。

そこで本研究では、A大学における体育科模擬授業の場面を時間計測し、各運動領域に現れる偏りとその特徴を明らかにし、体育科のよりよい教授法の習得に向けた課題について検討する。

Ⅱ．研究の概要

1．研究対象者と対象科目の概要

A 大学における小学校教諭一種免許状取得のための必修科目「体育科指導法」の 2018 年度から 2021 年度実施の授業を対象とした。受講者は 2018 年度が 26 名、2019 年度が 13 名、2020 年度が 12 名、2021 年度が 17 名であり、すべての受講者が受講時に小学校教諭一種免許状取得を希望していた。

表 1 は授業内容の展開を示したものであるが、A 大学では 2020 年度以前が二学期制で、2021 年度以降に三学期（トライメスター）制を導入したため、ここでは便宜上、2021 年度の内容を記載している。主に前半は体育科の学習内容についての理解を深め、後半に指導案の作成を含めた教授法について取り上げた。本研究で取り上げる模擬授業は、体育科の教授法を身につけることを目的に実施し、そこでの記録をもとにフィードバックを行うことで授業者としての基本的教授能力の向上と定着を目指したものである。

2．模擬授業の方法と対象の運動領域

模擬授業は 45 分の時間設定で実施した。その際の当該科目授業全体（70 分間）の流れとしては、全体像の説明に 10 分間、模擬授業の実施に 45 分間、模擬授業の反省と評価に 15 分間を振り分けた。全体説明では、事前に決定している対象学年と単元計画、本時のねらい、授業展開上の約束事などを教師役である実施者に説明させ、その後の模擬授業につなげさせた。反省と評価の場面では、まず評価シートに授業評価とコメントを記入させ、その後に教師役と児童役双方の立場から数人に感想を述べさせる形式をとった。

なお、小学校学習指導要領体育編には、すでに述べたとおり「体づくり運動系」「器械運動系」「陸上運動系」「水泳運動系」「ボール運動系」「表現運動系」の六つの運動領域が示されているが、模擬授業の対象から「水泳運動系」は除外した。それは、A 大学では水泳実施の環境が十分に整っていなかったからである。

3．模擬授業の観察と記録

模擬授業の場面と時間の配分の分析には、期間記録法を適用した。期間記録法とは、授業場面を「マネジメント」「学習指導」「認知学習」「運動学習」の4つの場面で区切り、それぞれの場面に費やされた時間を計測する方法である。本研究では図1に示すコーディングシートを用いた。

これら4つのカテゴリーは、体育の授業場面の分析において並列するものではない。表2に示すように、まず「マネジメント場面」と「体育的内容場面」の二つに大別され、「マネジメント場面」を表すのが「マネジメント (M)」であり、「体育的内容場面」を表すのが「学習指導 (I)」「認知学習 (A1)」「運動学習 (A2)」である。

「マネジメント」とは、クラス全体が移動、待機、班分け、用具の準備、休憩など学習効果に直接つながらない活動全般を表す。体育館や運動場など、広い空間で行う体育の授業は他の科目と比較しても移動や待機の時間が長くなるため、この時間をいかに減らし体育的内容場面を増やすことができるかが、よい体育授業に向けた最初の条件になる。

「学習指導」とは、教師がクラス全体の子どもに対して説明、演示、指示を与える場面のことで、教師の的確な説明が求められる。一方で、この場面は教師の活動が中心となるため、マネジメント場面と同様にできる限り時間を少なくすることが望ましい。そのためには、説明や指示に必要な掲示物などをあらかじめ準備するとともに、演示の際にはポイントを端的にわかりやすく、明確に伝えることが必要となる。

「認知学習」は、児童がグループで話し合ったり、学習カードに記入したりする場面のことで、思考力・判断力・表現力を高めるための児童の主体的な活動を目指す場面である。この活動は学習カードを用いて行われることが一般的であることから、教師には効果的な学習カードの作成が求められる。

「運動学習」とは、子どもが準備運動、練習、ゲームを行うなど、身体活動を通じた学習場面を指し、4つのカテゴリーの中で最も重要な時間である。体育科の特徴である、自らと他者の活発な身体活動を通して学習するという、学びの核となる部分を実践する場面といえる。この時間を十分に確保し、より充実した学習を行うために、マネジメ

ント場面の削減、明確で端的な学習指導、認知学習の深まりが必要となる。

Ⅲ．各運動領域の授業場面比較と課題

1．各運動領域の授業場面におけるカテゴリー別時間について

各運動領域の授業場面のカテゴリー別時間とその割合をまとめたのが表3である。以下、各運動領域の結果と課題について述べる。

1) 体づくり運動系

マネジメントの場面の平均値が目安の10%を大きく上回る19.6%となった。また、学習指導の時間も目安の20%を超えて30%に迫る29.3%となった。そのため、児童の学習時間が大きく削られ、認知学習時間は平均で5.4%、運動学習時間は目安を下回る45.7%であった。

特に、認知学習は時間換算では2分25秒と非常に短くなっている。体づくり運動系は数字などで表現できる成果を見だしにくい領域ではあるが、運動を好きになるという目的に沿えば、運動による身体と心の変化を主観的に評価し記述させることができるようなワークシートが準備されればよかった。2020年度こそそのような試みがあったが、全体的には極めて短い時間に、教員が少数の児童を指名して感想を述べさせるだけの活動がほとんどであった。

2) 器械運動系

マネジメントの時間が23.8%となり、学習効果に直接つながらない活動に多くの時間が割かれている状況が浮き彫りになった。それにより、運動学習時間が全体の50%を確保することができず、授業の勢いを出すための基礎的な条件の不達につながっていることがわかる。一方で、学習指導時間と認知学習時間は平均では目安となる割合となっており、ある程度、適正な時間配分がされた様子が見える。もっとも、認知学習については2019年度に全く実施されておらず、2021年度に実施したグループでのワークシートの作成で多くの時間があてられたことにより平均化したという点は配慮すべきである。

器械運動で使用するマットや跳び箱は準備と片付けに多くの時間と労力を費やすことになる。そのため、マネジメント時間が増える傾向にあるが、授業開始前に準備が完了するように当番制を採用したり、片付けの場面においては安全に十分配慮しながらゲーム形式を取り入れたりするなど、その削減のための工夫を凝らすべきである。また、順番待ちなどの間の時間も生じやすい。そのときに、児童がただの傍観者とならないよう、相互に技を観察しポイントを指摘し合える環境を整えるなどして、認知学習と運動学習が同時進行で行われるよう工夫した授業が求められる。

3) 陸上運動系

マネジメント、学習指導、認知学習時間がそれぞれ目安よりも10%程度多くなり、結果的に運動学習時間が26.9%と極めて少なくなっていることがわかる。運動学習時間の目安は50%以上なので、模擬授業の結果は明らかに少なく、是正すべきポイントにあげられる。

要因として、走・跳の動作を数多くこなそうとすると児童への身体的な負担が多くなってしまわないかといった考えがあると思われる。確かに、それらの動作のすべてを繰り返し行うことには一定の配慮が必要であるが、走・跳の運動はいくつかの動作が合わさることで成り立つものである。すなわち、それぞれの動作を分割して個別化し、サーキットトレーニングのように順に実施したり、苦手とする動作を児童が主体的に判断して集中的に学習したりする内容を検討すべきであった。

また、器械運動系と同じく、児童が互いを観察し、動作のポイントなどを助言し合えるような展開が必要である。認知学習の際には、学習指導要領体育編にあるように映像などが容易に撮影できる通信機器の導入も有効であろう。

4) ボール運動系

模擬授業を実施した5つの運動領域の中で、4つのカテゴリーが最も目安に近くなった。学習指導時間が目安に対して5%ほど多くなっているが、時間にすると2分を少し超える程度で、許容できる範囲

である。

ボール運動系がこうした傾向にあるのは、授業展開そのものがどの球技を扱おうともドリルゲームからタスクゲーム、そしてメインゲームといった一定の流れに則って行われたからであると考えられる。つまり、基礎的な運動動作の学習とその定着を目指したミニゲーム、そしてまとめとなる試しのゲームといった授業設計が容易だったのである。ネット型、ゴール型、ベースボール型のいずれも、こうした展開に当てはめることによってマネジメントの少ない勢いのある授業につながった。ただし、こうした全体の進行上のスムーズさを目指すあまり、児童ひとりひとりの技能の習得が疎かになってはいけない。ボール運動は、学年が進みゲーム成立のための技能レベルが高まってくると、到達レベルが不十分な児童は運動そのものを楽しめなくなってしまう傾向にある。そうした児童を少しでも減らすことができるように、授業全体の流れと児童の技能習得とのバランスは、授業を展開する上で常に意識的である必要がある。

5) 表現運動系

認知学習の時間が 26.3%と多くなっているが、これは 2018 年度の模擬授業で極端に長いグループワーク活動があったことが大きく影響している。ただ、他の 3 回の結果を平均しても、その時間は比較的長くなっている。これは、イメージやリズムの世界に没入して身体を動かすことに楽しさを見いだす領域でありながら、それらを創造することに注力してしまった様子が見ええる。結果として、すべての時間において運動学習時間が短くなっている。このことから、児童に授業の中で動きの創造を求める場合には、いくつかの動きを例示するなどして思考的活動を援助し、認知学習時間と運動学習時間の適正な配分を意識するべきである。

ただし、互いの特徴を生かした空間の醸成のためには、児童の主体的な思考や判断を引き出すことが必要にもなる。そうした観点から、特に表現運動系ではそれぞれのカテゴリーを本時ではなく単元としてとらえ、認知学習に重点をおく時間と運動学習に焦点化する時間に分けて展開することも検討すべきであろう。

2. カテゴリー別時間割合の運動領域間の比較

各運動領域のカテゴリー別時間割合の比較を示したのが図2である。ここでは、運動領域間の比較を含みながら、模擬授業を実施する上での授業場面の配分について、特に特徴的であったマネジメント時間と運動学習時間についての課題に言及する。

最も大きな問題として指摘するのは、マネジメントの時間の多さである。ボール運動系を除く四つの領域すべてで目安を大きく上回り、授業時間の20%を超える場合がほとんどであった。時間に換算すると10分近くが学習に直接つながらない時間として消費されたことになる。慣れない教授法の実践とあって、マネジメント時間が多くなることは予見できたことであり、教授法の理論を学習する際にはマネジメント時間の削減の重要性について重点的に取り上げたが、それが実践時には結びつかなかった。

一般的に、マネジメント時間は「学習環境の整備と片付けに費やす時間」「学習活動中の直接学習に関わらない時間」の二つに大別されるが、今回の模擬授業においては双方において課題が見受けられた。

まず、整備と片付けに費やす時間の削減のためには、児童に対する明確な学びの場の設定指示と、順序良く安全に行動できるような約束事が不可欠である。そのためには、児童の特性を理解した上で行動の傾向を予見する必要があるが、予見と指示の両方が不足していた。そのため、指示が重複したり、教師が同じ場所に留まらざるを得ず全体へのモニタリングが不足したりするなどの事象が生じ、結果、マネジメント時間の増加につながった。こうした状況の改善に向けた課題としては、児童の状況に即した指示を与えることや、すべての児童に役割が行き渡るようにすること、あいまいな指示は避け明確に情報を伝えること、安全に十分配慮した上でカウントダウンや時間の計測などを用いて児童に時間の意識付けをさせることなどが考えられる。

また、授業中の直接学習に関わらない時間の多さも目立った。この時間は、移動や待機、順番待ち、コートチェンジや出番の交代などにより生じるが、この時間を減らすには、明確な指示や移動を前提とした集合場所の工夫、望ましい行動に対する賞賛などの教師の直接的な

言動に加え、運動学習のためゲームをミニ化して活動場所を増やすこと、順番待ちの間に観察や審判、記録の作成などといった認知的で支援的な学習環境を充実させることなども効果的と考えられている。それを前提に今回の模擬授業を検討した場合、例えば集合場所などについては学習の場へのスムーズな移行に配慮した設定ではなく、体育館の入り口や器具庫に近く白板などを移動させる必要がない、教師役である実践者にとって都合がよい場所を指定する傾向にあった。したがって、結果として児童役の移動時間に多くの時間を費やさざるを得ない場面が多かった。加えて、学習課題である大きな運動技能のまとまりを整理、細分化し、それらを個別に修得させるために有効な下位教材の活用についても不十分であった。そのため、例えば跳び箱などでは運動を苦手とする児童が十分に活動できる場が準備されておらず、待機時間というマネジメント行動につながってしまっていた。児童の活動場所を増やすには、それだけ多くの準備を必要とするわけであるが、その準備こそがよい体育授業の実現には不可欠である。もっとも、その準備には時間と労力を必要とするため、児童の助けを借りながら整備する必要がある。

体育科の主たる学習である運動学習の時間については、どの領域においても少なかった。50%を超えたのはボール運動系を取り扱ったときのみで、陸上運動系の時には30%に満たなかった。多すぎるマネジメント時間が運動学習時間を削ったとも考えられるが、他教科にはない運動学習時間の十分な確保とその充実は大きな課題である。運動学習時間の確保と充実のためには、まず、これまで述べてきたマネジメント時間を減らすことが有効であるが、教材への深い理解を前提とした下位教材の活用も重視すべきである。

教材づくりの基本的な視点としては、児童が運動の特性と魅力を理解した上で目標となる運動動作を習得し、ゲームなどの戦術を理解しつつ仲間や相手との積極的なかわりを目指すための内容的視点と、児童の興味関心と能力に配慮しつつ学習の機会均等化を図り、児童にとって挑戦的でおもしろいものを追求する方法的視点がある。下位教材を創出するには、この二つの視点を前提に、児童個々の認知的で技術的な内容に対応した課題のスモールステップ化を目指すべきである。

模擬授業では、特に方法的視点が欠落していたように見えた。課題のスムーズステップ化には運動課題の段階的・順次的な学習をめざし、より細やかな複数の学習教材を準備することが必要となるが、運動課題の全体像を正確に把握することができず、あるいは把握していたとしてもその運動課題を成立させるための技能間の関係性を十分に理解できずに下位教材を創り出していた。それゆえ、本時のめあてとミニゲームとの内容に齟齬が生じ、めあてを意識した児童役がその内容を質問する場面や、それに気づいた教師役が活動の場に移動した児童役に内容の修正を説明せざるを得ない場面が散見された。加えて、児童の活動の場所を増やす工夫に物足りなさを感じた。例えば、器械運動技の習得にはその習熟度に応じて児童が活動できる場を複数設けるべきであるし、陸上運動系では個別の能力に応じて設定した課題に向き合える場や、個人ではなく集団として課題を捉える「課題の集団化」などが有効な方策であるが、それらを実践的に導入した教師役は極めて少なく、そうした挑戦的な取り組みがみられなかったことは模擬授業を通して残念に感じた部分である。

IV. おわりに

本研究では、A大学における体育科模擬授業の場面を時間計測し、各運動領域に現れる偏りとその特徴を明らかにし、体育科教授法の習得に向けた課題について検討した。まず、各運動領域については次のようにまとめる。

①体づくり運動系

マネジメントの時間が長く、認知学習の時間が非常に短くなっていることが特徴であった。認知学習は児童の主体的で協働的な学びの実現に不可欠であり、運動の達成が見えにくい本領域であっても適切なワークシートを活用すべきで、例えば運動による心身の変化や仲間との関係性を、児童が自己の言葉で表現できるような内容を準備することが望ましい。

②器械運動系

マネジメント時間の多さが、運動学習時間の少なさに繋がっていた。準備と片付けに時間が割かれていただけでなく、児童にとっての学びの場の種類が少なく、順番待ちの場面が多いことも影響していた。技能別の学習の場を増やすなどして児童の運動学習時間を確保するとともに、順番を待っている間にも技のポイントを観察し相互作用を働かせる環境と整えて認知学習時間を増やすなどの工夫が求められる。

③陸上運動系

運動学習時間が非常に少なくなっており、その要因として、反復練習による児童への身体的な負担への強い配慮があった。走・跳の動作を成り立たせる技能を正確に理解した上で、それぞれの動作を分割して段階的に個別化して学習できるように学習の場を設定することが不可欠と考えられる。また、器械運動と同じく認知学習についても通信機器を用いるなどして注力する必要がある。

④ボール運動系

運動学習の時間が十分に確保されており、他の三つのカテゴリーの時間も目安となる割合に近くなった。これには、一定の流れに当てはめて行う授業展開が影響したと考えられる。こうした運動学習時間の確保とマネジメントの削減は評価すべきであるが、全体のスムーズさにばかり気を取られ、児童の技能習得が疎かにならないよう配慮が必要である。そのため、技能の達成度を評価できるようなワークシートを準備し、未達の児童には個別に課題に取り組めるような学習の場を準備すべきである。

⑤表現運動系

認知学習の時間の多さが課題であるため、創造的活動の助けとなるような動きを例示するなど認知学習時間と運動学習時間の適正な配分を意識することが必要である。ただ、過度な情報の提供は児童の主体的な思考や判断の妨げとなる可能性があるため、認知学習と運動学習の時間に配慮した単元としてのカリキュラム設計が重要に

なる。

次に、模擬授業を実施する上では授業場面の配分が重要で、特にマネジメントの削減と十分な運動時間の確保が課題であることがわかった。

マネジメント時間の削減には、まず整備と片付けに費やす時間を減らすため、児童への明確な指示と約束事が欠かせないが、模擬授業ではそれらが不足していた。そのことから、児童の状況に即した指示の徹底や役割の明確化、安全への配慮を徹底したゲーム化などが必要である。また、直接学習に関わらない時間の減少には、明確な指示や児童の移動を前提とした場の工夫、望ましい行動に対する賞賛などの教師行動に加え、ゲームのミニ化と認知的で支援的な学習環境の充実が図る必要があることがわかった。

運動学習時間の十分な確保は教材づくりの基本的な視点のもとで計画されるべきであるが、特に方法的視点が欠落しており、それは下位教材の創出と課題のスモールステップ化のための運動課題の全体像の把握と技能間の関係性への理解不足に換言される。ただ、今回の模擬授業の場では、こうした課題を解決するための実践的な場の導入の試みが少なかったことが最も大きな問題であった。

本研究で明らかになった体育科の模擬授業における課題が、今後のA大学における科目「体育科指導法」の模擬授業において生かされることを切に願い、結びとする。

図表掲載

表 1 「体育科指導法」科目内容の展開

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	11	体育指導上の留意点① ・モニタリングと相互作用 ・マネジメントの方法
2	体育科の経緯と基本的性格	12	体育指導上の留意点② ・インストラクションの方法 ・運動有能感を高める指導
3	体育科の目標と内容	13	保健領域の検討
4	体育科の内容と構成	14	指導計画の検討と指導案の作成
5	運動領域の検討① －体づくり運動系、器械運動系－	15	模擬授業①－体づくり運動系－
6	運動領域の検討② －陸上運動系、水泳運動系－	16	模擬授業②－器械運動系－
7	運動領域の検討③ －ボール運動系、表現運動系－	17	模擬授業③－陸上運動系－
8	よい体育授業とは	18	模擬授業④－ボール運動系－
9	体育の学習について	19	模擬授業⑤－表現運動系－
10	体育の評価について	20	模擬授業の評価結果の検討とフィードバック、まとめ
		21	期末試験

授業場面	場面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	内容										
授業場面	場面	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	内容										
授業場面	場面	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	内容										
授業場面	場面	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
	内容										
授業場面	場面	41	42	43	44	45					
	内容										

図 1 体育授業場面のコーディングシート^{注 1}

表2 授業場面の各カテゴリーについて

カテゴリー		表記	内容	割合の目安
マネジメント場面	マネジメント (Management)	M	クラス全体が移動、待機、班分け、用具の準備、休憩などの学習効果に直接つながらない活動に充てられている場面。	10%
体育的内容 場面	学習指導 (Instruction)	I	教師がクラス全体の子どもに対して説明、演示、指示を与える場面。子どもの側からみれば先生の話の聞いたり、演示を観察したりする場面。教師の発問によって子どもの思考活動が中心になる場面は「認知学習」となる。	20%
	認知学習 (Activity 1)	A1	子どもがグループで話し合ったり、学習カードに記入したりする場面。	10%
	運動学習 (Activity 2)	A2	子どもが準備運動、練習、ゲームを行う場面。	50～ 60%以上

表 3 各運動領域の授業場面におけるカテゴリー別時間と割合

運動領域	実施年度	マネジメント		学習指導		認知学習		運動学習	
		時間	割合	時間	割合	時間	割合	時間	割合
系 体 つ く り 運 動	2018	460	17.0	850	31.5	50	1.9	1340	49.6
	2019	710	26.3	910	33.7	80	3.0	1000	37.0
	2020	560	20.7	710	26.3	410	15.2	1020	37.8
	2021	390	14.4	690	25.6	40	1.5	1580	58.5
	平均	530	19.6	790	29.3	145	5.4	1235	45.7
系 器 械 運 動 系	2018	750	27.8	680	25.2	430	15.9	840	31.1
	2019	710	26.3	370	13.7	0	0	1620	60.0
	2020	480	17.8	560	20.7	160	6.0	1500	55.6
	2021	630	23.3	760	28.1	450	16.7	860	31.9
	平均	642.5	23.8	592.5	21.9	260	9.6	1205	44.6
系 陸 上 運 動 系	2018	590	21.9	750	27.8	770	28.5	590	21.9
	2019	630	23.3	590	21.9	510	18.9	970	35.9
	2020	750	27.8	680	25.2	430	15.9	840	31.1
	2021	390	14.4	1130	41.9	670	24.8	510	18.9
	平均	590	21.9	787.5	29.2	595	22.0	727.5	26.9
系 ボ ー ル 運 動 系	2018	390	14.4	550	20.4	430	15.9	1330	49.3
	2019	320	11.9	690	25.6	190	7.0	1500	55.6
	2020	150	5.6	840	31.1	420	15.6	1290	47.8
	2021	210	7.8	600	22.2	180	6.7	1710	63.3
	平均	267.5	9.9	670	24.8	305	11.3	1457.5	54.0
系 表 現 運 動 系	2018	200	7.4	530	19.6	1730	64.1	240	8.9
	2019	750	27.8	680	25.2	430	15.9	840	31.1
	2020	640	23.7	610	22.6	460	17.0	990	36.7
	2021	590	21.9	820	30.4	220	8.1	1070	39.6
	平均	545	20.2	660	24.4	710	26.3	785	29.1
全平均		515	19.1	700	25.9	403	14.9	1082	40.1

(時間単位：秒、割合単位：%。割合は少数第二を四捨五入して表記)

している)ので合計が 100%にならない場合がある)

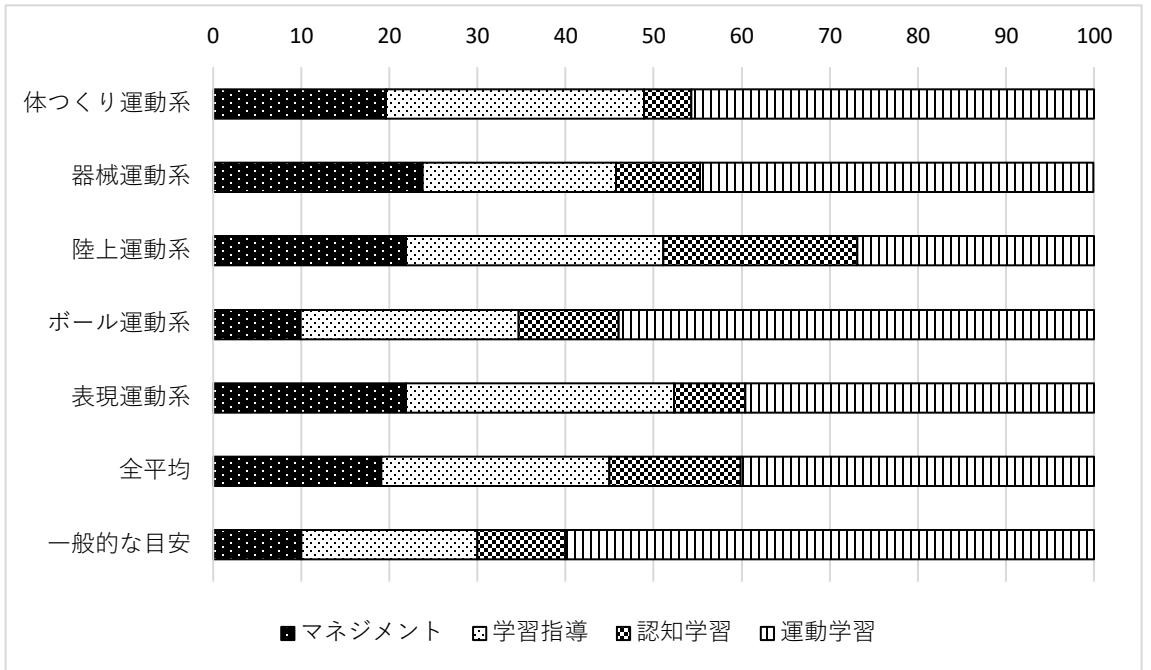


図2 各運動領域の授業場面におけるカテゴリー別時間割合 (%) の比較

注

注 1 高橋健夫・吉野聡「体育授業場面を観察評価する」高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版，36－39 及び 170-171 頁，2003 年．

引用・参考資料

- ・高橋健夫編『体育授業を観察評価する』明和出版，2003 年．
- ・高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編『新版 体育科教育学入門』大修館書店，2010 年．
- ・岩田靖・吉野聡・日野克博・近藤智晴編『初等体育授業づくり入門』大修館書店，2018 年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 体育編』東洋館出版，2018 年．
- ・福ヶ迫善彦「小学校体育授業の単元過程における〈授業の勢い〉の事例的検討－各授業場面及び学習従事量の推移パターンの分析を通して－」『国士舘大学体育研究所報』21，85-95 頁，2003 年．
- ・木原成一郎・村井潤・坂田行平・松田泰定「教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第 56 号，85-91 頁，2007 年
- ・柿木亮・長登健・鄧鵬宇・岡原友紀「体育模擬授業時の学習場面の分析－本学学生が行う模擬授業の改善点を探る－」『城西国際大学紀要』第 28 巻第 1 号，13-25 頁，2020 年．
- ・足立美和「期間記録法から見る指導法における課題点－小学校体育科運動領域の模擬授業において」『共立女子大学家政学部紀要』第 71 号，169-174 頁，2025 年．